

③ 越劇の理解と普及を通して新たな  
地域文化を創出するための研究

1. 各種の市民団体との協働により、伝統的民俗文化、  
伝統的地域産業等をテーマに、地域資源の再発見チームの立ち上げ



## 中国のタカラヅカ、 ご存じですか？



『梁山伯と祝英台』

2006年、神戸学院大学で杭州越劇院による古典名作が上演されました。『梁山伯と祝英台』は中国では千年にわたって語り継がれ、きわめて広い地域でさまざまな民間芸術形式によって演じられてきた作品です。男装し、男として学校で勉強する少女祝英台とその同級生梁山伯との悲恋物語。「中国のロミオとジュリエット」と呼ばれています。親の決めた結婚に逆らえず命を絶った二人は、墳に生まれ変わって、一緒にひらひらと飛んでいくのでした。  
『万里の虹に満開の花、蝶はついでひらひらと、天地が裂けても離れぬは、梁山伯と祝英台』  
梁山伯（男役）：陳雪萍、祝英台（女役）：周好俊

中国には三百近い地方劇種があります。そのひとつ「越劇」は、「中国の宝塚」と呼ばれます。女性観客をターゲットに女性俳優だけで演じる劇種です。

越劇の源流は1900年代初頭、浙江省紹興付近の農村芝居にさかのぼります。当時は男性農民が村の話題を民歌のように歌って聞かせる語り物に簡単な身振りをつけた素朴なものでした。

現在上演されている越劇は40年代上海で中国共産党の指導の下に形成された新しい劇種です。今や京劇に次ぐファン数を有する越劇。上海では明日のスターをめざす若手のオーディション番組も大人気。今日も多くの美女たちがしのぎを削っています。



2011年、孫文記念館友の会の中に、「越劇同好会」が発足しました。「地域力再発見をめざす大学と地域との連携・協同による実践的研究」の一環として、神戸学院大学の中山文が越劇と地域のファンの橋渡しをいたします。

定期的に越劇ビデオの観賞会、研究者を招いて講演会(勉強会)、越劇俳優による実演や越劇観劇ツアーも考えています。

あなたもいっしょに越劇を楽しんでみませんか？

越劇同好会世話役：中山文 fumi@human.kobegakuin.ac.jp , 小松敏美

# 「越劇の理解と普及を通して新たな地域文化を創出するための研究」 2011 年度報告

中山 文、伊藤 茂

## 第 1 回 越劇友の会

### 「組織作り」

#### ① 孫文記念館（移情閣友の会）

2009 年 11 月、移情閣友の会 25 周年記念に、小松敏美会員の紹介で上海越劇院女優章瑞紅氏を招へい。当日の越劇紹介を中山が担当。前日に本学で越劇ワークショップを行った。

2011 年 8 月、中山から移情閣友の会の中に「越劇同好会」として発足させたい旨を提案。

6 人以上の友の会会員がひつようだが、小松氏による華僑女性の勧誘→6 名の参加

#### ② 中国演劇に興味のある日本人探し

9 月、本学中国語非常勤への呼びかけ→他大学大学院生を 6 名の参加

\* 「移情閣越劇同好会」の発足 <http://tomonokai.ko-co.jp/e195174.html>

### 「第 1 回例会」

10 月 10 日 孫文記念館 月見の会で、宣伝パネル（桑島先生作）の展示。それに合わせて第一回例会。8 名の同好会員が集まり、自己紹介。中山が同好会発足の経緯と趣旨説明、具体的活動方針を説明、第二回例会の日程を決定した。

#### 第 1 回ミーティング。

孫文記念館が行った辛亥革命 100 周年記念イベント「月見の会」にあわせて、「越劇同好会」第 1 回ミーティングを行った。8 名の同好会員が集まった。

中山が同好会発足の経緯と趣旨説明を行い、具体的活動方針を説明



## 第2回 越劇友の会

2011年11月20日(日) 14:00-16:00 114D 参加者5名

### 「越劇の美しさ——梁山伯と祝英台」(2005)を見る

#### 【感想カード】

#### Z.Y.

久しぶりに『梁祝』を鑑賞することができて、楽しかったです。

若い頃に越劇の『祥林嫂』『紅樓夢』などを見たことがあります。しかし、日本に来てから、こういう越劇を見る余裕もなく、とても残念でした。今日は、6年前に見られなかった『梁祝』を見ることができ、とても感謝すると共に感無量です。特に、2005年演出の楊小青先生が、定年退職年齢になっても、一生懸命に努めて素晴らしい越劇作品を創られていることに、とても感心しました。

陳雪萍の担当した男役・梁山泊も一心不乱に、素朴に演じられていて、その精神が印象深いものでした。

今日から、これから、気持ち的に越劇を基礎から勉強したらどうかな？と思いますが、中山先生が専門家なので、私にどんどん教えて下さい。

頑張ります。

#### M.K.

女の子が男装して活躍するお話は好きなので、元々ストーリー自体に興味を持っていました。当たり前ですが、読み物として味わうのと、実際にお芝居として味わうのとでは、全く印象が異なりました。

音楽や演出など、現代的な要素もどんどん取り入れられている分、馴染みのない者にも歩み寄り易い娯楽であると思います。

ただ客席で見るだけでなく、自分たちも参加していくという芸能が「現役」である、その状況が羨ましいです。

他の古典芸能にはあまり探し出せない、様々なタイプのヒロインが見られるのも楽しみです。

#### M.I.

面白かったです。歌唱力の素晴らしさに感動しました。舞台造形も現代的で、明るく、解り易いことに驚きました。

#### I.E.

権力や大人の思惑、駆け引きが渦巻く中で、梁山伯と祝英台のまっすぐで純粋な思いがとても印象的でした。

普段着ていた服が城を基調とした黄緑のものだったのも2人の爽やかさや初々しさを象徴しているようで、また結ばれ蝶になったときの赤い服も、結ばれひとつになったことで一層深まった2人の絆の強さを表しているように感じました。

赤という色は、中国では国旗に使われたりするなど、かなり重要な扱いを受ける色なので、蝶の服装には

ただ見た目の美しさだけでなく、なにか特別な意味合いが含まれているのかな、と思いました。

今回観たのはかなり現代人の感覚に合わせているようで、2人が完璧ではない、等身大の存在に感じ、とても親近感の湧くものでした。

ただ、もともとのオリジナルの時代背景が東晋だったという話も聞くので、オリジナルの時代背景とその雰囲気も併せて知っていれば、どこにどうアレンジを加えたかを比較したりして、一層楽しめた気もします。

以上、簡単で内容の薄いものではありますが、今回の感想とさせていただきます。

これを、2005年当時に生で観られなかったのが残念です……。

## 資料：「越劇の美しさ——梁山伯と祝英台」（2005）

### 1. キャストとスタッフ

梁山伯（りょうざんぱく）・・・陳雪萍

祝英台（しゅくえいだい）・・・周好俊

音響・・・李舟

衣裳・化粧・・・胡亜莉

ナレーション・・・宮本毬子

照明・・・池田誠一郎・瀬戸愛弓

音響・・・宮本秀彦・平井博道

字幕・・・中山文

字幕操作・・・田村容子

### 2. 越劇について

中国には三百近い地方劇種がありますが、そのなかに日本の宝塚歌劇団のように、女性観客をターゲットに女性俳優だけで演じる「越劇」という劇種があります。越劇の源流は1900年代初頭、浙江省紹興付近の農村芝居にさかのぼります。当時は男性農民が村の話題を民歌のように歌って聞かせる語り物に簡単な身振りをつけた素朴なものでした。

現在上演されている越劇は40年代上海で中国共産党の指導の下に形成された新しい劇種です。恋する男女がひとつになって封建主義と戦うというロマン主義のもつ革命性を劇種の特徴としていました。袁雪芬を中心とした「越劇十姊妹」の改革運動は、共産党員だけではなく、新時代を迎えようとしていた中国で広く女性たちの共感をよびました。謝晋監督映画「舞台姊妹」1966年には越劇成立当時の状況が詳細に描かれており、初心者にも理解しやすくおすすめです。

文化大革命では越劇も他の地方劇同様迫害をうけ、後継者不足と観客減少に悩みました。しかし80年代の改革開放政策以後、浙江省越劇“小百花”演出団が、戯曲界全体の希望の星として、華々しい活躍を始めます。このチームは世界マーケットに照準を合わせた総合芸術を目指し、新たな女子越劇のブームを生みました。その要となったのがトップ小生の茅威濤と彼女の育ての親である楊小青です。彼女の創る美しく詩情あふれる舞台は、中国の知識人を魅了してやみません。彼女によってそれまで「女子が見るもの」とされていた越劇に、新しいファン層がうまれました。楊小青の波乱万丈の人生については、「インタビュー：楊小青と越劇の60年」（『中国21』Vol.20 特集：中国演劇におけるジェンダー）をお読み下さい。

### 3. 『梁山伯与祝英台』について

「万里の虹に満開の花、蝶はつがいひらひらと、天地が裂けても離れぬは、梁山伯と祝英台」（孫玄齡著・田畑佐和子訳「中国芝居の人間模様」白亭社）

『梁山伯与祝英台』は中国でほぼ千年にわたって語り継がれ、きわめて広い地域でさまざまな民間芸術形式によって演じられてきた作品です。上の階層ではなく、庶民の間で愛され広まりました。

女性らしいしとやかな生活をするよりも男性同様に杭州で勉強したいという活発な女性祝英台が主人公。男装して勉強のために杭州に向かいます。道中、梁山伯に出会い、「女性も勉強をするべきだ」と語る彼に強い好意を抱きます。ふたりは兄弟として、また同窓生としての契りを結びます。祝英台は女であることを打ち明けないまま三年を過ごし、父に帰郷を促され実家に戻ることにになりました。

帰郷の前に彼女は師の夫人にふたりの仲人を頼み、結納の品として玉で作った蝶々の扇子飾りをあずけます。実家に帰る彼女を途中まで送っていき、塾に戻った梁山伯は夫人から祝英台が女性で、彼と結婚したがっていると聞かされます。梁山伯は大喜びで、先日送って行った道のりを今度は一人で歩いて求婚に向かいます。が、そのときすでに祝英台には地位ある馬家との結婚が決められていました。

父親から家柄が釣り合わないと言われ、バルコニーの二人は離れがたい思いに嘆き交わします。帰宅後、梁山伯はショックのあまり病死し、祝英台は死んだら彼のお墓に入ることを誓います。嫁入り当日、真っ赤な花嫁衣裳を着た祝英台はお墓参りを条件としてかごに乗り、真っ白の吊いの衣裳に着替えてかごから降り立ちます。すると突然の雷鳴に墓が二つに裂け、祝英台はなんのためらいもなくその墓に身を投げました。二人は蝶になり、雨上がりの虹の下、一緒にひらひらと飛んでいくのでした。

### 4. 杭州越劇院について

40年以上の歴史を持ち、レパートリーの豊富さ、俳優の層の厚さ、スターの多さで定評がある。『梨花情』『寒号鳥』『流花溪』など多数の国家レベル受賞作品をもつ。「人・作品・演技の新しさ、曲・舞・美術の美しさ」で「西子湖畔に咲き誇る満開の花々」とよばれる。これまで2度の日本公演をはじめ、アメリカ、カナダ、韓国、香港などの公演歴も多く、世界中に多くのファンをもつ。

### 5. 演出家ご挨拶

日本のみなさん、こんにちは。このたびは神戸学院大学で上演することができ、とても光栄に思っています。本日は『梁山伯と祝英台』の後半部分「回十八」「楼台会」「哭墳」「化蝶」の場面をご覧ください。本来越劇は舞台美術、照明、音響など現代的な効果をフルに活用する華麗な総合芸術です。今回は来日人数の関係で、最もシンプルな舞台と照明の下での上演になりました。日本のみなさんに気に入っていただけるでしょうか。

みなさん、どうぞ杭州においで下さい。そして今度は完璧な条件の下での越劇をご覧ください。きっとまた別の趣があることでしょう。お待ちしております。

## 出演者プロフィール



### 楊小青 (Yang Xiaoqing 1943 年生)

国家一级演出家。中国戲劇家協会理事、浙江省戲劇家協会副主席、浙江省演出家学会会長。主要作品に、越劇『西廂記』『陸游と唐琬』『流花溪』『家』など多数。『陸游と唐琬』は国家十大舞台芸術精品工程入選。『西廂記』は第4回文華大賞。越劇『西廂記』、昆曲『班昭』で演出家に与えられる最高の賞である中国戯曲学会賞を史上唯一の2度受賞。

### 陳雪萍 (Chen Xueping 1963 年生)

国家一级俳優。中国戲劇家協会会員。杭州越劇院男役俳優。2004年11月、胡錦濤中国国家主席のブラジル訪問に友好演出団メンバーとして同行。ヨーロッパ、東南アジアでの海外経験多数。『梁祝尋夢』の梁山伯、『流花溪』の成龍など、素朴で実直な範派の正統派後継者として非常に高い評価をうけている。中国戯劇節主



### 周好俊 (Zhou Yujun 1977 年生)

1994年浙江省芸術学院卒業、現在杭州越劇員女役俳優、越劇界のルーキーとして注目を受けている。『梁祝尋夢』の祝英台、『流花溪』の春花など、たおやかな美貌に芯の強さを感じさせる女性役に定評がある。『梨花情』の冷艶、『小宴』の貂禪など劇団の代表作ヒロインを好演。浙江省戯劇節優秀演技賞を受賞している。

## 第3回 越劇友の会

2011年12月24日（土） 14:00-17:00 142A

### 映画「舞台姉妹」（1965年）を見る

※ 18:30 より小瀋陽で忘年会

#### 【感想カード】

##### M.I.

主演女優2人がとても綺麗でした。映像も舞台っぽく、平板な取り方で綺麗でした。

しかし、やはり舞台の方が良いです。現在の感覚でいえば、共産党のプロパガンダ臭ささえなければ、もっと良くなったのに、と残念な感があります。

##### I.E.

春花と月紅の生き方の違いが印象的でした。自分の生きる道として芸の技に磨きをかけて、芸の道に誇りを持って先を見据え、長年確執のある姉妹も愛せる春花はとても格好良い女性に感じました。同時に、月紅も春花と同じようにプライドを持ちながらも、そのプライドの為に芸から身を退いて別の幸せを求め、相手の男性からの暴力と支配を受け役者としてのプライドと女としての幸せを求める気持ちの狭間で苦しむ彼女の姿にも、個人的に共感できました。

春花が袁雪芬さんをモデルにしているということで、ひとつの映画としても楽しめましたし、女性として生きる上で、何が幸せか？ どう動いていくのか？ 考えさせられる作品でした。

##### T.A.

当時の演劇の様子がわかって、面白かったです。特に前半のドサまわりをしているあたりが。

#### 資料：越劇史 映画「舞台姉妹」通して学ぶ越劇史

天馬電影制片廠 撮影 1965年

劇作：林谷、徐進、謝晋

撮影：周達明、陳震祥

主演：謝芳、曹銀

##### 1. あらすじ

童養媳 竺春花は虐待に耐え切れず、婚家を飛び出し、ドサ周りの越劇一座に逃げ込み身を隠す。同情した座長は彼女の賢さと美貌に才能を感じ一座に迎える。娘の邢月紅はたいそう仲良く、姉妹の契りを結ぶ。座長の死後、二人だけは「まじめに芸に身を捧げろ」の言葉を守って上海デビュー、人気をきわめる。当時上海は西洋文化と民族資本が集中する「魔都」と呼ばれた華やかな大都市。緊張した時勢から目を背けたい人々は娯楽を求めており、俳優にとっては誘惑だらけ。月紅は「女優」らしく華やかに墮落し、春花は芸術と革命の道を選ぶ。別離の運命。解放とともに、出奔した妹が舞い戻る。二人で再び演劇と革命の道へ。



## 「舞台姉妹」の見方

- ① 越劇の歴史。江南地方のドサ周り劇団
- ② 童養媳の悲惨さ ふたりの春花
- ③ 唱堂会。地方官僚（警察）の腐敗ぶり
- ④ 姉妹の絆 姉役竺春花が旦（女性役）、妹役邢月紅小生（男性役）  
「身を清く、正しく。まじめに芝居に取り組み。決して……」二人の手を重ね合わせる父  
その後の二人の運命。竺春花は袁雪芬自身と重なる。
- ⑤ 越劇伝統劇目「梁山伯と祝英台」
- ⑥ 魔都。40 年代上海。外国の租界。民族資本家。地方との格差。
- ⑦ 演劇界の封建制  
劇場主、興業主による経済的搾取。3 年間ただ働き。  
男性による性的搾取→老いて落ちぶれた越劇女王
- ⑧ 新作「馬寡婦開店」（色っぽい作品）について。客は喜ぶが青衣（良家の子女）役竺春花は不満。時流に合わない春花。サインの練習をする邢月紅。
- ⑨ 上海でチンピラ生活をする阿金の頼み。「我不唱堂会的」昼夜 2 回興業、合間に放送局、お座敷……「私たちは牛馬じゃない！」
- ⑩ 養母の申し出。金持ちの奥様のパトロン。頼りになるごひいき筋「過房娘」
- ⑪ 「衣装が多く、友達が多いのは上海でバカにされないため。」田舎者のコンプレックス  
看板の名前の大きさが変化。「嫉妬しないで」。唐支配人のひいき。姉妹に亀裂。過去の関係の思い、師匠の言葉を守りきれずに悩む春花。
- ⑫ 邢月紅、唐支配人と結婚、女優を引退。「これでバカにされずにすむ」  
役者という差別から女であることを武器に逃れようとする邢月紅。  
芸の道に精進し、女優であることにプライドを持てる社会にしようとする春花。
- ⑬ 「本当に彼を愛しているの？」「もう彼のものなの……」性的に支配
- ⑭ 商水花の首吊り自殺。「金のなる木、働き牛、唐の悪党、殺してやる」
- ⑮ 唐支配人による葬式。
- ⑯ 女性記者江波「どう報道すればいい？ 楠の棺桶を買ってすむことではない」
- ⑰ 共産党の接近、教育。春花「明らかに間違った道をなぜ進みたがるのだ？」  
江波「今大事なのは生きている女優たちに正しい道を教えること」
- ⑱ 共産党がサポートする話劇、映画。越劇もこうしたい。→魯迅「祥林嫂」ヒット
- ⑲ 国民党に恩のある唐。「日本占領時代のことはパン委員がもみ消してくれた」  
唐は月紅を使って上演阻止を図る。
- ⑳ 上演妨害するチンピラ、銃弾入り脅迫状。女優仲間の支援
- ㉑ 自分の道を後悔する邢月紅。「役者ふぜいが！」禁演
- ㉒ 越劇十姉妹による連合上演。自分たちの劇場を！「社会こそが舞台だ。小老板の後ろには大老板がいる。そのうしろにはアメリカがいる」搾取する制度。共産党指導による越劇改革。話劇からのブレーン
- ㉓ 暴漢に目をつぶされる。世論の支持→裁判
- ㉔ 国民党は共産党との争いを避けるために姉妹の争いに矮小化する。月紅が阿金を雇い春花を襲わせたというシナリオ。ドメスティックバイオレンス。
- ㉕ 実際の悪人は邢月紅ではない。彼女は墮落し、利用されただけだ。

- ②⑥ 1949年、解放。「人民戯曲は民主精神と愛国精神で人民を教育するための重要な武器である」(『戯曲改革工作に関する政務院指示』)  
1950 土地改革宣伝隊として全国慰問。「白毛女」上演。故郷へ。  
小春花、邢月紅と再会。
- ②⑦ 「やっと家に戻った。間違った道に進んでしまったこと、後悔してるの。必ず生まれ変わるわ」再び二人で芸の道に精進。父の言葉を守った娘たち
- ②⑧ 竺春花の座り姿に注意！  
「今後要認真的改造自己、唱一輩子革命的戲（これからはまじめに自分を変えていき、一生革命の芝居を歌っていく）」→「父の娘」越劇。師匠から党へ。

## 第4回 越劇友の会

2012年2月19日(日) 11:00-17:30 113B

1部 11:00-13:45

『祥林嫂』ビデオ観賞

2部 14:00-15:30

森平氏講演会

「越劇大師袁雪芬氏ご逝去1周年を記念して」

\*『梁祝』衣裳展示

15:30-16:00 質疑応答

16:30-17:30 次年度の活動と

「越劇入門」作成について会議

※ 19:00-21:00 三宮で懇親会(味香苑)

### 【感想カード】

N.A.

初めて越劇をDVDではありますが、見せて頂いて感謝します。

貧しい女性のあり得る人生を描き、来世にも救いがないことを描いて、あるべき生き方を考えさせられるものと思いました。

「森平先生」歴史的背景を分かりやすく説明頂き、ありがとうございました。

### T.M.

森平先生の講演会については、恥ずかしいながら、自分は 20 歳まで中国に居たにも関わらず袁雪芬先生のことをあまり存じ上げなかった。越劇については、少しだけ知っているだけで、本当に恐縮に思います。森平先生のお話で、より一層興味を持って袁雪芬先生の偉大さと、越劇の由来を感じさせられ、大変勉強になりました。ありがとうございました。

### K.S.

何の予備知識のないまま、今回の講演会に参加してしまいましたが、非常に興味深く聞きました。特に越劇と他の地方劇とは共産党が求める役割が違うという点です。革命の為の演劇としては他の地方劇の方が功績が多かったけれど、外交向きの華やかな劇であった為に別の方向に進んだという話は印象的でした。

また、袁雪芬先生が 4 つの女性の典型的な姿を表現したという話も楽しく聞かせて頂きました。

### A.Y.

今回、越劇を観て中国のジェンダーな部分を非常に意識しました。未亡人というだけで縁起が悪いと言われる、祭りの手伝いや参加を拒否され、最期は惨めに亡くなっていく映像を観て、女性進出の社会問題を訴えていることがよく理解できました。「纏足」とか聞いたことがあるのですが、中国の男尊女卑の文化は日本文化のものよりも強いように感じました。中国の女性は本当に厳しい環境で生きてきた文化を持つのだな、と改めて感じました。

### K.H.

1 度幸せを経験してしまったからこそ悲劇がまた染みしました。賀老六と阿毛が死ぬ時に泣く演技だけでなく、涙を流していたのが印象的でした。土地廟に敷居を奇進したけれど、祝福の準備には参加させてもらえず、暇を出される時の家の額が「積善堂」とあったところに皮肉を感じた。『祝福』の衣裳が借り物ではなく購入した所に先生の意気込みを感じました。靴の男女の違いが実際に履くことでよく解りました。見るだけでなく、体験できるのはやはり楽しいですね。

越劇の琴についてはほとんど知らず、袁雪芬の名前だけ聞いたことがあるくらいでしたので、今年年表で易しく講演して頂いて解り易かったです。『舞台姐妹』の映画の映像も少し見せて頂きましたが、舟に乗って客が観ている等、どのように観劇していたのかも、よく解りました。

派閥の話も、興味深かったです。新しい派を作らせて、独自に演目を作らせたり常に試行錯誤させることで、今の越劇があるのだな、と思いました。

### Y.T.

ほとんど何も知らない状態で見させていただきました。魯迅については中山先生の授業で様々なものが物語の中に詰め込まれているというものを学び、考えながら観賞できました。もっとセリフを淡々とするものだと思っていましたが、あんなにミュージカル的なものだとは思っていませんでした。中華風のメロディーが好きなので楽しかったです。中国語は解らないのであらすじだけ頭に入れ、この場面はこうだなと想像しながら観ることができました。

### Z.L.

越劇の歌のように、滑らかでさらっとした口調で 1 時間くらいお話を伺いました。とても解り易くて、充実した内容で思わず全部メモを取ってしまいました。袁雪芬の一生と彼女が努めた越劇界の変容や革命的な影響がよく勉強になりました。本当にありがとうございました。

---

## 张应华「我看《祥林嫂》」

越剧《祥林嫂》是根据鲁迅的原作《祝福》改编的。《祝福》原作是我中学时代语文课上学过的。当时对鲁迅的原著理解并不是很深刻。记得第一次观看的越剧《祥林嫂》是电影，大约是在30多年前看的。是在一所学校的露天操场上看的。椅子是自己带去的。但是，那时的我还没有结婚，对于守寡的苦难妇女生活还谈不到完全理解。时隔多年的今天，重新再看鲁迅的作品，重新再看袁雪芬的演艺和唱腔，才感到鲁迅是真正站在劳苦大众的立场上，替社会底层的无处伸冤的祥林嫂来叫冤，替千百万过着地狱般生活的妇女在呐喊。袁雪芬大师级的越剧表演也让我再次得到刮目相看。

祥林嫂是一个受尽了封建族权，神权，夫权甚至婆婆之权压迫的农村妇女。她的丈夫祥林病危时，债主就劝婆婆逼着要将祥林嫂卖给他人；祥林死后，祥林嫂为了躲避厄运，逃到鲁四爷家做女佣。债主又把祥林嫂抢到山里，强迫祥林嫂与贺老六成亲。贺老六人好，勤奋，又吃苦，夫妻恩爱苦也甜，隔年祥林嫂喜生一子。按说夫妻可以过上恩爱的生活。谁知没过几年，贺老六却突患伤寒而病死，儿子阿毛也被山里的饿狼吃掉了。迫于生活的无奈祥林嫂只好又回到鲁四爷家继续做女佣。而鲁家却嫌弃她嫁过的两个男人都死掉而不吉利，对祥林嫂千般欺负万般压，使祥林嫂受尽了折磨，吃尽了苦头。尽管这样，祥林嫂还是想要改变自己的悲惨命运，她用自己辛辛苦苦忍受凌辱得来的两年的血汗钱，给附近土地庙捐了一条门槛，让千人踩，万人踏来洗刷自己的不幸。然而祥林嫂的不幸不但没有因为捐门槛而减少，最终却被鲁四爷赶出了鲁府。祥林嫂悲愤至极，叫天天不应，叫地地不灵。愤怒的祥林嫂手执利斧奔向土地庙朝门槛砍去。在鲁府“祝福”之日，祥林嫂惨死在风雪之中。真是“朱门酒肉臭，路有冻死骨。”

越剧中的祥林嫂是由袁雪芬饰演的。没想到这一演竟然演了40年。我前边说了，我第一次观看越剧祥林嫂是在30多年前看的。谁知到如今看的还是袁雪芬饰演的。是在网上看的。时代的变化太快了，而鲁迅刻画的祥林嫂越看越觉得深刻，越看越觉得鲁迅的伟大。而饰演祥林嫂的袁雪芬越演越觉得人性味越浓。我在想，究竟是鲁迅写的人性味浓，还是袁雪芬演的人性味浓，我分不清楚。感情上应该认为是鲁迅写的人性味浓，而理性上我却认为还是袁雪芬饰演的人性味浓。因为她是用她一生的演艺生涯扮演了祥林嫂。我完全被她的认真的表情，到位的动作，执着的饰演所征服。她把祥林嫂扮演的太生动了。演到极致了。袁雪芬不仅扮演了祥林嫂，而且还创作设计了《祥林嫂》，她一直在不断地改编，不断地创作更加完善的祥林嫂，真不愧是一位大师级的越剧演员。袁雪芬辛苦了。

越剧电影中《祥林嫂》，上半部分是由金采风扮演的，下半部分是由袁雪芬扮演的。特别是“厨房”里的一场戏，袁雪芬用那悲哀的唱腔和柔弱的姿态把孤独无依的祥林嫂对未来生活的恐惧扮演的真实生动。而当祥林嫂用她全部的劳动所得去捐了土地庙的门槛，兴冲冲地回到鲁四爷家，准备过年的祭祀品时，鲁四爷却大声喝斥到“放下”！简直就像一个晴天霹雳，一下子把祥林嫂给彻底打“清醒了”。祥林嫂原以为捐了土地庙的门槛，过去的“不幸”就可以让门槛代替了，自己就能和以前过年时“杀鸡，宰鹅，煮福礼”一样了。然而在鲁府，祥林嫂仍然还是那个不幸的死了两个丈夫的“罪孽”之人。清醒的同时，祥林嫂所有的希望也就彻底绝望了。这一切都可以在袁雪芬的扮演中得到了淋漓尽致的表现。

正是在“祝福”时节，祥林嫂被“朱门”的鲁四爷赶出了鲁府。这一场戏是全剧的高潮。祥林嫂那一声声悲惨的“我抬头问苍天，苍天啊！不开言。我低头问人间，人间也无言。”让我充分理解了在鲁迅的笔下看到了一位勤劳善良的祥林嫂是封建社会劳动妇女的典型写照，也从袁雪芬的精湛表演看到了现代女性和祥林嫂不一般的人生。

2012年2月19日

## 資料：「祥林嫂」

### 1. 魯迅『祝福』（1924『東方雑誌』発表、映画「祝福」北京電影制片 1956 年）

#### 1. あらすじ

辛亥革命前夜の紹興。寡夫祥林嫂彼女は姑に再婚を強要され逃げ出す。魯鎮にある魯四旦那のお屋敷に奉公。よく働くため重宝され、生き生きと働く。姑に連れ戻されて山奥に住む賀老六に嫁がされる。祥林嫂は泣き叫び大暴れして嫌がる。再婚相手はやさしく、息子も生まれ、しばし幸福。夫はあっけなく病死、息子は狼に食い殺される。家を追われ、再びお屋敷に奉公にでる。二度も寡婦となった彼女を嫌う魯四旦那は、祝福（年越しに行う幸運祈願の先祖祀り）の準備には手を触れさせてはならぬと厳命する。

子供を失った不幸から立ち直れない祥林嫂は、以前ほど働けない。「私がばかでした」と自分の物語を繰り返す。はじめは同情した者もしだいに飽き、彼女をからかう。柳媽から、再婚した女は地獄に落ちて閻魔様にのこぎりで二つに裂いて二人の夫にわけられるのだと聞かされる。贖罪のために土地廟に敷居を寄進することを決意。1 年後に望みを果たす。本人の喜びに反し周囲は態度変わらず、やはり祝福の準備には参加させてもらえない。すっかり木偶のようになってしまった彼女は、半年後にはひどく老けこみ暇を出される。

乞食となった彼女は都会から里帰りしていたインテリの「私」（語り手）に、「人間が死んだ後も、魂はあるんでしょうか」「地獄もあるんでしょうか」「死んだ家族はまた顔をあわせるのでしょうか」と問いかける。満足な答えを得られないまま、彼女はその翌日に路傍で行き倒れて、果てる。

#### 2. 祥林嫂の不幸の原因

「祥林嫂の生涯は封建社会の様々な天災人禍の苦しみを嘗めつくしたようなもの」「礼教（儒教）が祥林嫂を食い物にした」。当時の紹興の旧弊な婚姻制度の害悪

##### ① 童養媳（トンヤンシー）

「嫁御二十に婿どのは十、寝るときゃベッドに抱き上げる。夫といっても小さすぎ、息子と呼んでも母じゃない。婿どの大人になるときは嫁御はすでに年をとり、花の咲くときゃ葉はしばむ」

##### ② 再婚

夫に先立たれた妻が再婚せず一生貞節を守ることを「節」、夫の死に殉死したり、みずから死をもって貞節を守ろうとすることを「烈」という。「嫁さらい」の風習。

##### ③ 寡婦

亡夫への守節強いられるばかりでなく、世間から「冷たくあしらわれ、嘲られ、馬鹿にされて、いわば二重の凌辱に耐え」ねばならず、「不吉の象徴と見なされ」忌み嫌われる存在

「祥林嫂」という名前。「祝福」という祭りの皮肉

#### 3. 語り部「私」 \*もう一人の主役

（祥）「ちょうどよかった。あなたは学問をした方だし、外（よそ）にも出て、たくさんのことをしていなさる」。 （私）「生きるすべなき者が、その死によって、目をそむける者たちの視界から消え去るのは、お互いのために、決して悪いことではあるまい」

\* 「伝統的読書人かつ近代的知識人」。魯迅自身の無力感と絶望

## II. 越劇『祥林嫂』（越劇「祥林嫂」上海越劇院、1978年）

袁雪芬「魯迅という人のことは知らないが、祥林嫂のような女性なら私はよく知っている。私の祖母にも母にも祥林嫂の影があった。だから私は彼女に同情し、演りたいと思ったのだ。」

### 1. 愛された経験をもつ女性：「第7場」（『洞房』）

賀老六 泣かないで、きっとあなたを大事にするから。

〔二人は黙りこんでその場に座っている。祥林嫂は悲しくなり、またおもわず泣きだすと、傷が痛み、喉の渴きを感じる。賀老六はその様子を見て、一杯茶をいれ、近寄る。〕

賀老六 泣かないで、……貧乏人は身体がだいじなんだから。（茶を彼女に渡す）

〔祥林嫂はその誠実なことばに少し感動するが、茶を受け取っていいものやら悪いものやら決めかねている。〕

〔賀老六はやむなく湯呑を彼女のそばに置くと、そばを離れた。〕

祥林嫂 （湯呑を取り上げ一口飲んで）借金はどうやって返すつもりなの？

賀老六 そんなものはなんでもないさ、辛いことを嫌がりさえしなければ、借金なんて返せるよ。力だけはたっぷりあるからね！

〔祥林嫂は茶を飲みながら、彼を見つめる。〕

（幕裏の合唱）祥林嫂は賀老六を見た、心根のやさしい素敵な人だ。

二人で一生懸命働けば、きっと夫婦で苦楽を分かち合えるに違いない。

### 2. 自分の運命を変えようと行動した女性：「第11場」（『千悔恨、万悔恨』）

「再婚した女は地獄に落ちて閻魔様にのこぎりで二つに裂かれる」

「その時はだまっていたが、ずいぶん悩み苦しんだと見え、彼女が翌朝起きてきたときは、目のまわりに大きな隈ができていた」

祥林嫂 （歌）千回恨み万回悔やんでも悔やみきれない、どうしてあの時一度で死ねなかったのか。今になって二度目の夫が死んだことを、大きな罪とされてしまった。みな私が不吉な運命の持ち主、夫を克する不浄な星の持ち主だという。……やっぱり土地廟に行って敷居を寄進して、私の身代わりに千人に踏んでもらい、万人にまたいでもらおう。それで私のこの世の大罪をつぐなうのだ。

### 3. 自分の言葉をもつ女性：「第14場」（『問蒼天』）

祥林嫂 訴えねば……何としても訴えねば……（数歩歩いて立ち止まり）いったいどこへ？……どこへいけばいいのだろう！……ああ、神様！」

（歌）私は顔を上げ、天に問うしかない。

（幕裏の合唱）顔を上げ、天に問う

祥林嫂 魂は本当にあるのですか、本当に？

（幕裏の合唱）だが、天は答えてくれない。

祥林嫂 今度は頭を下げ、人々に問うてみる……。教えてください、地獄は本当にあるのですか？……死んだ家族はまた顔をあわせるのでしょうか？……教えてください……どうぞ教えて」

文部科学省戦略的研究基盤形成支援事業 地域研究プロジェクト

## 追悼袁雪芬先生ご逝去一周年記念講演会

越劇の第一人者袁雪芬氏が亡くなり、2月19日にちょうど一周年を迎えます。  
越劇同好会第4回例会では、袁雪芬氏を追悼する記念講演会を企画しました。  
ぜひご参加ください。

日時：2月19日（日）午後2時～3時30分

場所：11号館113B教室

演題：「越劇大師袁雪芬氏ご逝去1周年を記念して」

講師：森平崇文氏（早稲田大学演劇博物館）

\* 11時より同教室で「祥林嫂」のDVDを観賞します。

\* 「梁山伯と祝英台」の衣装を展示します。

「祥林嫂」



袁雪芬：紹興生まれ、正旦。1933年から芸の道に入り、杭州、上海などで上演。彼女の女優としての成長過程は、そのまま越劇史となっている。袁派創始者、享年89歳。

## 袁雪芬再考 —— 一周忌に

森平 崇文（早稲田大学）

この度は20世紀中国を代表する演劇人の1人である越劇俳優袁雪芬先生（1922-2011）の一周忌に際しまして、このような会を開催して頂き、袁先生を敬愛するものの1人として深く感謝申し上げます。本報告は袁先生の生涯及び越劇界に残した偉大な足跡を時代順に紹介し、併せてこれまでの越劇史においてあまり言及されてこなかった一面についても触れたいと思っております。袁先生は存命中、越劇界の指導者として神聖化される傾向が他の越劇俳優に比べ強かったために、1人の越劇俳優として歩まれた足跡などはステレオタイプ化された紹介を除きますと、その指導者イメージの中に隠されてきました。しかし激動の20世紀中国の中で、俳優として70年以上過ごされてきたわけですから、あまり知られていませんが、演劇史的に非常に興味深い業績や事件が多数あります。そこでお亡くなりになった現在、それら多方面にわたる足跡を公開して紹介することが、袁雪芬先生の全体像を深く理解することにつながると考えております。なお本報告では以下、故人のため敬称は全て省略いたします。

まず一般的に知られています袁雪芬の功績について紹介したいと思います。越劇俳優としましては、指導者として越劇を浙江省だけでなく、上海更には中国を代表する地方劇の一つへと導きました。そして越劇の流派「袁派」を創始して『祥林嫂』や『西廂記』などの代表演目を残し、後継者の養成に努めました。また20世紀中国を代表する芸術家としましては、中華人民共和国成立以降、演劇改革の旗手・職業女性の代表・上海文化界のリーダーの一人としてそれぞれ大きな役割を担われました。最後に越劇団を率い、或いは文化使節団の一員として世界各国を訪問され、中国の海外交流にも貢献されました。

このような袁雪芬の足跡につきましてはご存知の方も多く、またお調べになりましたら容易に理解される所でございます。次に袁雪芬の生涯を5つの時期に分けて、詳細に紹介してまいります。

### 一、袁雪芬の生涯

第1期は生誕された1922年から最初の大きな転機が訪れた1942年までです。袁雪芬は越劇の故郷であります浙江省嵊県の農村に、7人姉妹の3女として生まれました。袁雪芬の人格形成に大きな影響を与え、生涯敬愛し続けた父袁茂松は、袁雪芬に抛りますと教員をしていたそうですが、娘を当時賤業とされた俳優にせざるを得ない家計の状況を考えますと、代用教員ないし家庭教師に相当する教員であったと推察されます。しかし、当時の農村で字が読める人間というのは極少数です。周囲のほとんどが文盲であった環境下において、字が読める父を持ち、その父から読み書きを習っていたという点で、袁雪芬は演劇界に足を踏み入れてからも強い矜持を抱き続けました。そしてそれが周囲の悪習に染まらず自分を律する上で大きな作用したと考えられます。

袁雪芬は1933年11歳の年に地元の越劇一座である「四季班」に入ります。この一座の命名は袁雪芬の父がしたそうです。当時袁雪芬の周囲にいた、家計の負担を軽減するため幼くして自活せざるを得ない少女たちには、主として3つの選択肢がありました。第1は、男の子が生まれた家を買われていき男子が成人するまでは子守などをして働き、成人の後にはその男子の嫁となる「童養媳」になることです。第2は、上海の紡績工場に働きに出ることです。そして第3に俳優になることが挙げられます。袁雪芬の父は彼女が紡績工場の工員になることを望みましたが、袁雪芬は父の強い反対を押し切って俳優の道を選びました。先ほどお話ししましたように、俳優は当時賤業の一つとされていました。しかしながら、袁雪芬の故郷は越劇発祥の地でも





写真 1 袁雪芬（左）馬樟花（右）

あり、俳優になって成功したものが周囲にいて、俳優になることへの抵抗感は他の地域に比べると強くなかったのではないかと推察されま

す。  
11歳の袁雪芬は一座の中でも年少の方でした。当時の契約で修業期間は3年です。回想の中で袁雪芬は自分の修業開始時期が早かったために、旅回り一座の女芸人が日常的に直面する金銭的性的誘惑や強要を、自ら体験することが少なかったと述べております。1936年9月に初めて大都市上海で舞台に立ち、1938年からは以後70年以上に及ぶ上海での定住が始まりました。

上海で袁雪芬と舞台上でコンビを組んだのが馬樟花（1921-1942、写真1参照）です。1歳年長の馬樟花が男役、袁雪芬が女役でした。この馬樟花が1942年に病死し、袁雪芬自身も肺病にかかり療養のため帰省します。そして帰省中に、最愛の肉親である父が亡くなりま

す。つまり同じ年に、舞台上の最愛の相手役と、最愛の肉親を失ったわけです。袁雪芬の生涯で1942年が最初の転機となるのはそのためです。病が癒えて上海に戻った袁雪芬は亡父の遺影と遺訓を部屋に掲げ、以後舞台の上で固定した相手役と組むことはなくなりました。越劇にはタカラヅカのように男役と女役の長きにわたる息の合った人気コンビが多数いてそれが魅力の1つなのですが、馬樟花に対する強い思いからなのか、袁雪芬の場合は『祥林嫂』であれば范瑞娟、『西廂記』であれば徐玉兰というように相手役を固定しませんでした。

これから映像を見て頂きます。1965年に謝晋（1923-2008）が監督した映画『舞台姐妹』の最初の場面です。この映画は姉妹の契りを交わした2人の越劇女優の、出会い・上海への進出と成功・生き方の相違による衝突と別れ・再会を描いており、越劇の歴史を知る上でも大変参考になります。このうち1人の越劇女優の物語は、袁雪芬の半生を下敷きにしています。謝晋監督も越劇の故郷浙江出身であり、冒頭の場面は袁雪芬が劇界に足を踏み入れた頃の浙江における越劇公演の様子がよく再現されております。ではご覧ください。

（映像鑑賞）

実はこの映画が放映された翌年に文化大革命が中国で起こります。袁雪芬も隔離審査されるなどの迫害を受けますが、その際に批判されたのがこの映画『舞台姐妹』でした。

では次に第2期に入ります。第2期は病氣療養を終えて上海に戻る1942年から中華人民共和国が成立する1949年までです。上海に戻った袁雪芬は劇場と交渉し、自分の一座に脚本・演出・装置・音楽などを担当するスタッフを招き入れます。そして上演演目の決定権を握り、舞台衣装や背景・化粧の改良にも力を注いで、更に楽屋へ関係者以外の立ち入り禁止を決めるなど諸改革を実行しました。この「新越劇」の看板を掲げた袁雪芬の



写真 2 越劇十姐妹（1947年）、袁雪芬（前左3）

越劇公演は人気を博しました。その後、1943年11月に初演された『香妃』公演では新しい節の創出に成功し、1944年9月には一座を「雪声劇団」と命名します。そして1946年4月には代表作となる『祥林嫂』を初演し、上海の文化人からも注目を受けるようになります。

この時期になりますと越劇は上海において京劇と匹敵する規模の人気と市場を擁するようになり、袁雪芬も上海越劇界を代表する人気俳優の1人となりました。この間の越劇界の出来事として特筆すべきことに、1947年8月の合同公演があります。これは袁雪芬を含む10人の人気越劇女優が結集した空前絶後の公演で、越劇の歴史の中でも「越劇十姐妹」の合同公演として特記されています（写真2参照）。袁雪芬個人としては他に、1948年に『鶏鳴早看天』と『祥林嫂』の2本の映画に主演しています。ただし残念ながら、現在これらの映画を観ることはできません。

この時期の袁雪芬の起床から劇場公演までの様子を紹介した記事があります<sup>1</sup>。それに拠りますと、まず起床前にベッドでシナリオを読み返します。起床の後に洗顔等身支度を整え、亡き父の遺訓を復誦します。軽い朝食を摂り終えると、ラジオを聴きながら新聞を読みます。シナリオやエッセイなどは午前中に書いてしまいます。昼食を取った後、12時前には家を出ます。まずラジオ番組に出演し、13時半には劇場に到着して14時半の開演に間に合うよう準備を始めます。このようにこの時期の袁雪芬の生活は、人気俳優の華やかな様子とは程遠い質素なものでした。実際、当時の越劇女優を含むほとんどの人気俳優は、より多くのパトロン・支援者を得るため社交に熱心でしたが、袁雪芬は興行関係者を含む社会の名士たちとの社交を、自分は仏教信徒であるため精進料理しか食さないという理由で拒絶し、質素な生活を通しました。袁雪芬のこのような芸能界の華美さに染まらずに自らを厳しく律する態度は、人民共和国内立以前から一貫しておりました。

またこの時期の袁雪芬に関し誤解されておりますのは、共産党関係者とのつながりについてです。確かに共産党地下組織に属する于伶<sup>2</sup>のような文化人と交流していましたが、袁雪芬自身が語る場所に拠れば于伶を「進歩的」な人とは認識していましたが共産党員とは知らず、1949年5月に上海が共産党統治下になる段階でも、袁雪芬には共産党や共産主義に関する知識は全くなかったそうです。共産党側が袁雪芬に注目して接触していたことは確かですが、袁雪芬の方は共産党関係者と交流していたという意識はありませんでした。

では第3期に入ります。第3期は中華人民共和国が成立する1949年から1956年までです。なぜ1956年で区切るのかにつきましては後程言及します。中華人民共和国が成立するのは1949年10月1日ですが、袁雪芬はその直前の9月に開催された全国政治協商会議に招かれて上京します。そしてそのまま同会議の全国委員会委員に任命されるのです。これは俳優が初めて国政に参与するという、中国演劇史上前例のない栄誉なことでした。袁雪芬の他に会議に招待された俳優は、梅蘭芳（1894-1961）・周信芳（1895-1975）・程硯秋（1904-1958）の3名です。彼らは何れも男性で、国劇である京劇界を代表する名優でした。つまり当時27歳の袁雪芬は、若手俳優・女優・地方劇俳優の3つの代表を兼ねて演劇界の代表者に選ばれたということになります。1940年代、袁雪芬の上海における名声は既に確立されていましたが、人民共和国内立によって彼女は全国区での存在、中国演劇界を代表する俳優へと変わっていきます（写真3参照）。

中華人民共和国成立によって袁雪芬には様々な変化が生まれました。1つ目は公的に越劇界の指導者に選定されたことです。袁雪芬は1955年に成立し現在に至る、中国の越劇団として最大の陣容を誇る上海越劇院の初代院長に就任しますが、その前身である国営の華東越劇実験劇団（1950年成立）の段階で既に団長に任じられていました。そして袁雪芬は上海越劇院院長の職を1955年から1966年までと1978年から1985年までの間、務めました。つまり文化大革命期間の約10年を除き、中華人民共和国誕生から1985年まで一貫して

1 雪声劇務部編輯『雪声紀念刊—袁雪芬与新越劇』1946年、142頁。

2 于伶（1907-1997）は江蘇省出身の劇作家。1932年に共産党入党。代表作に『花濺泪』『夜上海』などがある。



写真 3 全国政治協商会議出席（1949年）、左から程硯秋・袁雪芬・梅蘭芳・周信芳

越劇界を指導する組織の長で有り続けたわけです。袁雪芬が同世代の越劇界の名優たちの中で特に神聖視されるのもこのためです。1954年には同世代の越劇女優の中で最も早く共産党に入党しました。

2つ目に海外との交流があります。京劇ではない地方劇の俳優にとって、これも中華人民共和国成立以前には考えられないことでした。袁雪芬は1950年10月から、ポーランドで開催される第2回世界平和大会とウィーンで開催される世界青年理事会

に参加する中国代表団の一員に選ばれ、東欧・ソ連各国を訪問しました。この人選には時の総理周恩来の意向が強く働いたそうです。

周恩来夫妻と袁雪芬ら越劇俳優との関係は特に親密でした。周恩来は、1954年にチェコ・スロヴァキアで開催される国際映画祭に出品する中華人民共和国初のカラー映画作品として、越劇の『梁山伯と祝英台』を選び、袁雪芬に祝英台役で出演するよう命じます。袁雪芬自身はこの映画作品の出来に大変不満で観たことがないと言っておりますが、この映画のお陰で役者として全盛期の彼女の演技と歌唱が映像に残されたわけです。更に1953年には、周恩来は訪中する北朝鮮の金日成のため、袁雪芬に越劇版『西廂記』の上演を命じます。現在袁雪芬の代表作の1つとなっている『西廂記』はこの時完成しました。このように、1950年代の袁雪芬並びに越劇の発展を語るに際し、周恩来の存在を無視することはできません。

そして1956年は袁雪芬にとり、大きな変化の生じた1年でした。まず私事として、上海を代表する3大紙の1つ『解放日報』の記者と結婚しています。袁雪芬の入院中に取材に訪れたのが馴れ初めだそうですが、袁雪芬の語る所では不幸な結婚となりました。相手の姓が「鄭」であることは明かしておりますが、配偶者について袁雪芬は、育った環境の違いによる不和と文革期の裏切りなど、悪い思い出以外あまり多くを語っておりません。この夫と袁雪芬の間には3人の子息がおりますが、袁雪芬は子供たちのために婚姻を継続させ、1990年にやっと離婚しました（写真5参照）。

1956年にはもう1つ、7月に上海市文化局が于伶から徐平羽に交代するということがありました。上海越劇院はこの上海市文化局の管轄下にあり、公演・上演演目・配役などに関しても市文化局は強い発言権を有していました。于伶は先ほどお話しましたように、1940年代から袁雪芬に協力的でありました。それに対し新しい局長は袁雪芬とそりが合わないだけでなく、袁雪芬に言わせると、袁雪芬を院長職に専従させて俳優として舞台上がることを妨害したそうです。この状況は1960年2月に文化局長が交代するまで続きました。1956年を以て区分とするのはこのためです。

第4期は1956年から文化大革命が始まる1966年までの間です。今お話したように1956年から1960年までは、私生活でも夫婦の不和、俳優としても直属の上司に邪魔されて不本意という悪い状況にありました。しかしながら、全く舞台に立つことがなくなったわけではありません。1959年は中華人民共和国成立10周年の記念の年ですが、それに合わせて袁雪芬は『秋瑾』を初演し、秋瑾を演じています。秋瑾は清朝末期に活躍した女性革命家で、しかも袁雪芬と同郷の人物です。翌1960年には、中華人民共和国成立後初めての越劇香港公演に副団長として参加しています。また1961年には、北朝鮮での越劇公演に副団長として参加

1. 各種の市民団体との協働により、伝統的民俗文化、伝統的地域産業等をテーマに、地域資源の再発見チームの立ち上げ

しています。そして1962年には1946年に初演され、袁雪芬の代表作である『祥林嫂』を大幅に修正し、現在上演されているものの原型を完成させました。そして越劇らしさが発揮できる時代劇の作品が上演困難となった1965年10月には、ベトナム戦争を題材に米軍と戦う女性ゲリラ部隊を描く新作『火椰村』を発表しています。そこで袁雪芬は主役でゲリラ隊を率いる竹嫂を演じています。

更に上海越劇院院長としても、1959年に女子のみであった越劇院の中に、時代の要請に応じて男女が合演する実験劇団を設けました。また1960年には養成所である上海越劇院学館を設立して、自らその主任を兼任しました。ただ何れにしましても、袁雪芬にとってこの俳優として最も脂の乗った30代半ばからの10年間は、満足できるほどの結果を残せませんでした。そしてその要因は、それが全てではありませんが、時代状況と置かれた環境にあったわけで、余計に悔しかったことでしょう。

そして最後の第5期です。第5期は文化大革命が始まった1966年から亡くなる2011年までの期間です。普通の時代区分ですと文化大革命とそれ以降は二分されますが、袁雪芬にとっては舞台上上がるのがほとんど無くなったという点で連続していると考え、このような区分にしました。

文化大革命が始まって間もない1966年4月、袁雪芬は先ほどご覧頂きました映画『舞台姐妹』に対する批判を受け、以後1973年5月までの約7年間、隔離審査の対象となり監禁されます。生後18日で離ればなれとなった三男とようやく再開を果たしたのは、彼が7歳の時でした。この間、袁雪芬の3人の息子の面倒を見てくれたのは既に高齢の袁雪芬の母親です。袁雪芬の幼年時代の思い出の中で語られます母親は、字が読めなくて娘の養育も夫任せの典型的農婦という印象しかなく、敬愛した父親と対照的な扱いでした。しかし、

この袁雪芬が最も大きな困難に直面していた期間、年老いた母親は泣き言を言わずに3人の孫を娘である袁雪芬に代わり育ててくれました。中華人民共和国成立以降、袁雪芬と母親の関係も好転したようです。

この文化大革命期には、『打倒袁雪芬』という小冊子も刊行されています(写真4参照)。ここには袁雪芬の祖父・父の代から文化大革命発生直前までの袁雪芬が犯した悪行が列挙されています。もちろんそのほとんどがでっち上げられたものですが、よく分からない袁雪芬の1930年代から1940年代の足跡も一部確認でき、興味深い資料ではあります。

1973年に家に帰るようになってからも、完全に名誉回復したわけではありません。そして1976年、袁雪芬を始めとする越劇界全体の庇護者であった周恩来が亡くなり、年内に文化大革命も終結します。この周恩来の死去は、当然袁雪芬に大きな打撃を与えました。1977年1月、周恩来の一周忌のための作品で袁雪芬は12年振りに舞台に立ちます。同年10月には『祥林嫂』も上演しました。

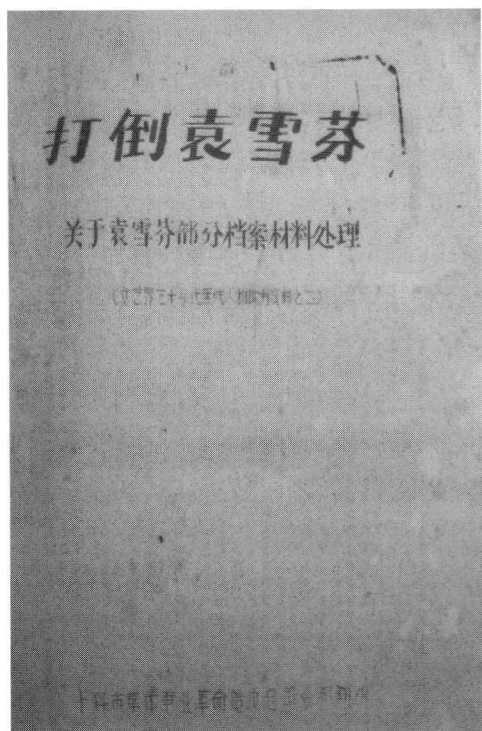


写真4 『打倒袁雪芬』(文化大革命期)

そして1978年12月、袁雪芬は上海越劇院院長に再び就任することを命じられ、完全に名誉回復を果たします。その後、

1985年に弟子筋の女優呂瑞英(1933-)に院長職を譲り、自らは名誉院長となって第一線からは身を退きました。袁雪芬に特徴的なのは、文化大革命が終結し、同世代の越劇女優たちが舞台に復帰する中で、ほとんど舞台に立たなかったことです。これに対し袁雪芬は、60代の自分が舞台に立っても納得できる演技はできないからと語っています。たとえ全盛時代は過ぎ去ったとしても、袁雪芬が舞台に立てば、観客は喜んで歓迎し

たことでしょう。しかし袁雪芬の美意識と自分に対する厳しい姿勢が、それを許しませんでした。納得のゆく演技ができないと分かっているのであれば、わざわざ舞台に立って晩節を汚したくない、という気持ちが強かったのだと推察します。これは俳優の態度として非常に立派だと思えます。

1985 年以降は越劇女優としては第一線から引退しましたが、それでも後進の指導、越劇界や演劇界の式典への出席、そして上海の演劇祭における審査委員長などを、今世紀に入ってからも続けており、更にテレビの演劇番組・歴史ドキュメンタリーなどへもよく出演していました。

少し長くなりましたが以上が袁雪芬の生涯です。もちろんお話ししたのは彼女の長い人生の中のほんの一部に過ぎません。しかしそれだけでも、袁雪芬の一生が越劇の歴史とほぼ重なっていることがお分かりになるとと思います。



写真 5 3 人の御子息と

## 二、越劇俳優袁雪芬

では次に、袁雪芬と彼女が生涯をかけて育て上げた越劇を、20 世紀中国演劇史の中で見ていきたいと思えます。中国共産党は演劇、とりわけ地方劇を一般大衆への教化・啓蒙、政治宣伝のための道具として重視しました。越劇は自らの魅力で大衆からの絶大な人気を得たと同時に、党の教導に忠実な優等生、「党の娘」としても十分にその責務を全うしてきたと言えます。その越劇界の指導者であった 1949 年以降の袁雪芬の足跡はまさしく「党の娘」としての立場で貫かれたものでした。

しかし「党の娘」であったのは、越劇及び袁雪芬だけではありません。共産党によって「党の娘」の役割を担うこととなった地方劇とその指導者となった女優は複数存在しました。地方劇の女性指導者という存在は、中華人民共和国成立後の女性の社会進出や地位向上を国内外にアピールする点で、視覚的にも大変有効でありました。

上海を例にとりますと、滬劇の丁是娥（1923-1988）と淮劇の筱文艷（1922-）が越劇における袁雪芬と同じ役割を担いました。2 人とも袁雪芬と同世代の女優です。ただこの両人と袁雪芬が決定的に異なる点は、丁是娥には『芦蕩火種』（1960 年初演）、筱文艷には『海港的早晨』（1964 年初演）のように、滬劇と淮劇の女性指導者には、文化大革命期の「革命模範劇」として京劇に改編されるほどの革命劇の代表作と持ち役があるのに対し、袁雪芬と越劇にはそれがないことです。しかしそれでも袁雪芬と越劇は、滬劇や淮劇に比べると「党の娘」として長女的厚遇を受けてきました。では袁雪芬と越劇に父親である党が求めたのは、どのような娘だったのでしょうか。それは海外の友好国や海外からの来賓に、自分たちの文化の華やかさや独自性を披露する、言わば外に連れて歩く自慢の娘としての役割でした。そこでは革命劇よりも、着飾った時代劇の上演が求められました。そして 1980 年代に本格化した改革開放政策の結果、演劇界も市場経済体制へと移行する過程で、計画経済期に人気のあった革命劇を担った滬劇や淮劇が市場を失っていく中で、越劇が依然として人気を保ち続けた理由として、1950 年代から 1960 年代にかけて革命劇に強く染まらなかったという点が大きいと思えます。

革命劇への傾倒が他の地方劇に比べ強くなかったことで、文化大革命による断絶からの回復という点で、越

劇は非常に有利でした。しかし忠実な「党の娘」であった袁雪芬にとり、革命劇の代表作を残せなかったのは遺憾なことです。既に舞台から遠ざかって久しい82歳の袁雪芬はインタビューの中で、自分が演じてきた女性について以下のような総括をしています<sup>3</sup>。

私は古代から現代までの、中国の幾つかのタイプの女性を演じてきました。『西廂記』の崔鶯鶯は伝統中国における貴婦人の典型と設定して演じてきました。ただ、崔鶯鶯自身の性格は自分と正反対であって決して好ましいとは思っていません。また、『祥林嫂』の祥林嫂は伝統中国における庶民の婦人の典型と設定して演じてきました。この2人の女性に関しては演じる度に改良を加え、ある程度納得のいく作品として残すことができたと思います。

一方、未完成のままとなった役もあります。『秋瑾』の秋瑾は辛亥革命時期の、家庭から社会へと革命の対象を広げていこうとする近代の革新的女性の典型と設定しました。また『火椰村』の竹嫂は階級闘争段階における現代の革新的女性の典型として設定しています。しかしどちらも改良を加える時間がなく、未完成のままに終わってしまいました。『火椰村』以外にも現代の革新的女性を題材にした作品を上演したことがあります、どれも成功しませんでした。これは本当に残念です。

つまり袁雪芬は、伝統中国における貴婦人と庶民のタイプの異なる2人の女性、及び近代と現代において革命に身を投じる革新的女性をそれぞれ演じることで、各時代各タイプの女性の典型を舞台上に再現し、それを後世に残す作品に仕上げようという構想を抱いていたのです。最終的にその構想は一部未完成に終わりましたが、それでも『西廂記』と『祥林嫂』の2作品が越劇の古典・代表作として現在も上演されています。また、後者の2タイプの女性を演じた作品は確かに未完成のままに終わってしまいましたが、その大部分の要因は袁雪芬の怠慢というよりもむしろ、彼女を存分に舞台に上がらせなかった政治状況にあったというのは本当に残念なことであります。

そして大変興味深いのは、袁雪芬がここで言及しています4作品の内、『西廂記』以外は何れもヒロインの見せ場が圧倒的に多く、相手役の男性の存在感がとても薄い点です。一般的に越劇を鑑賞する際には、ペアを組む男性役と女性役の息の合った掛け合いが楽しみの1つです。袁雪芬と同世代の越劇俳優には何組も人気ペアがいるのですが、袁雪芬は最初のパートナーであった馬樟花を失って後、特定の相手役を求めませんでした。そして実生活においてもパートナーである夫とは不仲で、最終的に離婚します。つまり、袁雪芬は父親を敬愛し、父亡き後には周恩来を父のように慕うなど、男性の父性的要素は必要としましたが、男性のパートナーとしての要素には舞台上でも実生活でもあまり期待しなかったのではと考えます。

次に袁雪芬の後継者に対する姿勢について触れたいと思います。袁雪芬の創始した流派「袁派」ですが、伝承者は意外に少なく、直弟子と言えるのは上海越劇院の方亜芬（1965-）などごく少数です。しかしだからと言って、袁雪芬があまり後継者の育成に熱心ではなかったのかというと決してそうではありません。実は、袁雪芬より少し年少の、袁雪芬から上海越劇院院長を引き継いだ呂瑞英を始めとする、張雲霞（1926-2004）・戚雅仙（1928-2003）・金采鳳（1930-）ら越劇女優は何れも袁派の影響を受け、袁派から学んで自らの流派を創始していきました。つまり袁雪芬は常に創造的であることを自分に課したように、後続の俳優たちにも創造的であることを課したのです。そこで袁派から多数の流派が派生して誕生していきました。袁雪芬は後続のものたちに、師である自分を模倣して演目を引き継ぐことよりも、後世まで残るような新しい節と演目・役を

3 DVD『劇壇瑰宝 芸術家訪談 袁雪芬 越劇』上海市文化広播影視管理局・上海文化広播影視集団・新滙集團上海声像出版社。

創造することを求めました。このような後継者養成方法は越劇界の中でも特異でありまして、絶えざる創造を追求した袁雪芬の特徴を表しています。

これからお話しすることはあくまで、これまで上海で越劇を観劇してきて感じた私個人の考えです。越劇が各世代の女性に特に人気を集めているのには、越劇の華やかさや美しさもありますが、舞台上の越劇女優たちが演技を通じて女優個人の人生を浮かび上がらせ、それに同世代の女性の観客たちが自分の人生と照らし合わせて共感する度合いが強いらなのではないか、と感じています。そうしますと、袁雪芬の人生は自分で自分の人生を切り開き、しかも異性のパートナーを拒むという点で同世代の女性の中でもかなり新しいものであったことでしょう。そして観客は、袁雪芬の自らの道を切り開いてきた人生に憧れ、時に共感しながら舞台上の袁雪芬を観ていたのではないのでしょうか。

最後に個人的なことを話します。実は私は 1 度ですが、袁雪芬にお目にかかったことがあります。その際のエピソードを紹介したいと思います。2002 年 8 月に袁雪芬の自伝が出版されました。2002 年 11 月に上海を訪れた際、私は上海越劇院内に入れるよい口実ができたこと、その自伝を購入するために上海越劇院へ出向きました。そこでたまたま声をかけて下さいました演出家の計らいで、会議のため来院していた、当時 80 歳の袁雪芬を紹介してもらったのです。会議中にもかかわらず、袁雪芬は購入した書籍にサインをしてくれまして、更にこれを私に進呈したいからと書籍代金を財布から出して私に返金してくれたのです。それから数分、わざわざ時間を割いて日本を訪問された時の話や、1949 年に全国政治協商会議に出席した時の話などをしてくれました。これは決して皆様に自慢するために披露したわけではありません。袁雪芬の人間としての器量の大きさや優しさが分かるエピソードだからです。袁雪芬は人から「あなたの姓は袁だから人間は決して円（円満）ではない」と言われていまし、確かに常に厳しい表情の印象が強いのですが、私の眼には円満で慈愛に満ちた芸術家と映りました。

以上でお話を終わりに致します。ご静聴ありがとうございます。

#### 【質疑応答】

Q：越劇の流派とはどのような概念ですか？

A：独自の節回しと演目があることです。

Q：袁雪芬が創作した新作はどのくらいありましたか？

A：数えたことはありませんが、例えば『雪声記念刊—袁雪芬与新越劇』には 63 の演目が挙がっています。これら全てが新作というわけではなく、改編なども含まれます。また自伝『求索人生芸術的真諦 袁雪芬自述』に付せられた上演演目一覧表には新作を含め 350 以上の演目が列挙されています。

#### 【参考文献】

雪声劇務部編輯『雪声記念刊—袁雪芬与新越劇』1946 年。

章力揮・高義龍『袁雪芬の芸術道路』上海文芸出版社、1984 年

盧時俊・高義龍主編『上海越劇志』中国戲劇出版社、1997 年

袁雪芬『求索人生芸術的真諦 袁雪芬自述』上海辞書出版社、2002 年

上海越劇芸術中心・上海越劇院芸術研究室主編『袁雪芬文集』中国戲劇出版社、2003 年

1. 各種の市民団体との協働により、伝統的民俗文化、  
伝統的地域産業等をテーマに、地域資源の再発見チームの立ち上げ

【映像資料】

『劇壇瑰宝 芸術家訪談 袁雪芬 越劇』

上海市文化広播影視管理局・上海文化広播影視集団・新滙集団上海声像出版社

『梁祝』 衣裳展示







\*越劇舞台衣裳及び舞台用靴の収集については、杭州在住の越劇演出家である楊小青氏の全面的協力を得ました。ここに感謝の意を表します。

---

## 第5回 越劇友の会

2012年4月22日(日) 14:00- 14:2A

### 「紅樓夢」を見る

#### 【感想カード】

##### M.I.

賈宝玉の女像がうまかった。歌唱力が素晴らしい上に、前半のファニーフェイスでの痴郎振りの演技から、ラストの変貌ぶりはすごい迫力でした。林黛玉の異様に長い演出も、ラブ・ストーリーと結婚問題を浮き上がらせて、案外よかった。

##### T.Y.

林黛玉は大観園での生活で、賈宝玉とつきあったり、他の家族の中で孤立しながらも自分の意思を持った、独立した女性として描かれているのだと思う。特に賈宝玉の結婚で、ひとり嘆き悲しんでいる『唱』の部分は、目線も鋭く、自分の強い気持ちを表現しているのが印象的であった。

##### O.A.

美しいものを見ることは、良いですね。

##### Z.Y.

又看了一遍《红楼梦》，感动还是一次又一次。  
林姑娘死了。宝玉来吃了。但是宝玉被骗了。

##### G.Y.

1962年の电影作品《红楼梦》(越剧)  
电影很真实地表现人的情感，非常好的发挥了中国戏曲一唱三叹的抒情特点。  
今天看起来，几十年前的舞台纪录的水平很不错。  
人物鲜明，情节紧凑，矛盾突出。特别对于婚姻的褒义留下了深刻的印象。

## 資料：「紅樓夢」

### 1 越劇について

「演劇は時代を反映する」

#### 京劇

- ・ 男性主人公が作品の演目が多い。『三国志』『水滸伝』など歴史上の英雄。
- ・ 20 年代から女性が劇場へ。女性観客増加。女性登場人物の多様化。

#### 越劇

- ・ 1900 年初浙江省の農村。半農半芸の男性。
- ・ 1910 年代上海へ。田舎の演劇から都会の演劇へ
- ・ 1920 年代、故郷で女優の養成。
- ・ 1930 年代、日中戦争。上海は「孤島」。租界に観客の増加。マスコミ事情。  
→女子越劇の大ブレイク。男性から女性へ
- ・ 1940 年代、袁雪芬の越劇改革。「話劇を父に、昆劇を母に」
- ・ 直接共産党の指導を受けて劇種形成。
- ・ 1950 年代の名作『紅樓夢』

### 2 小説「紅樓夢」について

清代の長編小説。原名は「石頭記」。「金玉縁」とも。「三国志」、「水滸伝」、「西遊記」とともに「中国四大名著」。

全 120 回：大貴族賈家の貴公子賈宝玉と従妹林黛玉との愛情物語を主軸に、大貴族の華やかな生活に潜む腐敗をえぐる。金陵十二釵。一世を風靡し、「紅学」「紅迷」の出現。

前 80 回（曹雪芹の作）：栄華を誇る賈家に不幸な事件が続き、傾くまで。

後 40 回（高鶚<sup>コウガク</sup>の作）：愛する林黛玉と結ばれず、薛宝釵と結婚してしまった賈宝玉が無常を感じて出家、出奔するまで。

#### おもな登場人物

賈宝玉：宝玉を口にくわえて生まれてきた。誰にでも愛され、女性に優しい、祖母の溺愛で世間知らず、無能な男。勉強嫌い。意淫の人。「女は水でできた体、男は泥でできた体だ」（第 2 回）。美を愛する

林黛玉：孤児、聡明すぎて舌鋒鋭い、敬遠されがち、やせ形、多病

薛宝釵：おとなしくしとやか、才気を出さない良妻賢母、豊満健康、年長者に愛される

王熙鳳：賈宝玉の兄嫁、家事一切を切りまわす、マネージメント能力高い、勝気、現実的

賈母：宝玉の祖母、賈家のグレートマザー

賈政：宝玉の父、きちんとした大人の男性。宝玉がふがいなく、腹立たしい

王夫人：宝玉の母